

横山ゆずり作 「小さな命の叫び」

<前編>

女の子たち (口々に)ジャーね!/ バイバーイ / 今日さ、英語の宿題...
藤沢典子 じゃ、文ちゃん、またあとでね。
塚田^{あやこ}文子 うん、塾でね。典ちゃん、バイバイ。
(効果音) (文子帰宅。家の戸を開けるかぎの音。)
(テレビのスイッチを入れる。テレビの音声、以後しばらくバックに。)

文子 あーあ、疲れた。
(効果音) お菓子の袋を開け、食べながら、チャンネルをガチャガチャ変える。)

文子 もう、詰まんない番組ばっか。(といいつつも見ている。)あ、そうだ、塾の宿題あったんだ。めんどくさいなあ。まあいいや、当たったら典ちゃんに聞けばいいや。
(大きなため息)今日は金曜日か...

ナレーション 塚田文子は、青春中学 3 年生。まだ新学期が始まったばかりだというのに、学校では、早くも“受験受験”とハッパをかけられる毎日。親に言われて、しぶしぶ塾に通い始めた文子でしたが、今のところ、受験勉強と言うよりは、親友の藤沢典子とのオシャベリのほうに熱心なようで...

塾の先生 ...というわけで、この三角形の相似条件は、必ず入試に出るから、覚えておくこと...

文子 (小声で)それでさ、典ちゃん。あたし、その時もうびっくりしちゃってさ。
先生 塚田さん、塚田さん!
文子 あ、は、はい、すみません。
先生 授業中はおしゃべりしないこと。いいですね。では、今日は終わります。
一同 ありがとうございます。
典子 文ちゃんってば、さっき、人のノート見て平気で答えちゃ生んだもん。あせっちゃった。度胸あるよ。

文子 まあね。典ちゃんにはお世話になります。感謝してるって。
あのさあ、典ちゃん。今日これから、ちょっと典ちゃんちに寄ってもいいかなあ。

典子 え、これから? だってもうこんな時間だよ。遅くなっちゃうよ。内は別にいいけど、文ちゃんち、お母さんにしかられない?

文子 うん、今日はね、ちょっとうちに帰たくないんだよね、あんまし。
典子 ふーん。いいよ、じゃ、おいでよ。
文子 サンキュー!
(効果音) (ガラガラ戸を開ける音。)

典子 ただいま。今日、文ちゃん連れてきたからね。ちょっと一緒に勉強するから。

弟 お姉ちゃん、お帰り。あ、いらっしやいませ。

文子 こんばんは。お邪魔します。

妹 お帰りなさい。あ、お姉ちゃん、後でお茶とお菓子持ってあげようか。

典子 うん、頼むね。

妹 ついでに、宿題、分かんないところあるんだけどなあ。

典子 宿題？ そんなの自分で考えなさい。頭よくななんいわよ。

弟 とか言っちゃって。本当は、お姉ちゃん、分かんなかったりして。

典子 何よ！ もうみんなあっち行ってなさい。邪魔しないで。

2人 はーい。文ちゃん、ごゆっくりどうぞ。(バタバタ退散)

典子 ったく、うるさいんだから。いつもこの調子なんだ。

文子 いいなあ、楽しそうで。

典子 え？

文子 なんか、典ちゃんがうらやましいよ。あんなかわいい弟や妹がいてさ。

典子 えー、あんなの、うるさいだけだよ。それに、弟なら文ちゃんだっているじゃない、まー君が。

文子 うちの正也は...普通の子じゃないもん。

典子 文ちゃん...。

(2人、しんみりする。)

ナレーション 文子の弟、正也は、重度心身障害児で、今は重い知恵遅れの子供たちの施設、「わかば学園」に入っていました。年齢は10歳でしたが、日常生活も満足にできないので、必要な訓練を受けるために、3年前からその施設に入ったのです。文子はそのことを、親友の典子のほかはだれにも秘密にしていました。

文子 いつも週末には、うちに帰ってくるんだ。今日も来てるはず。

典子 じゃあ、今日早く帰らなくちゃいけなかったんじゃないの？

文子 ううん、いいの。最近、あたし、正也が帰ってくる日は家にいたくなくて。

典子 まー君、文ちゃんに会えるの、楽しみにしてるんじゃないの？

文子 それは分かってるんだ。でも何となく、あの子見てると、気がめいっちゃうというか、つらいんだよね。体はどんどん大きくなっていくのに、いつまでたっても赤ちゃんみたいで。情けなくなっちゃうんだ。

典子 まー君いい子じゃない。いつもニコニコしてて。

文子 ニコニコしてるしか能がないんだよ。...典ちゃんはいいいね、元気な弟がいて。

典子 文ちゃん...。

ナレーション その夜遅く、文子は重い足取りで家に帰りました。

(効果音) (ガラガラ戸が開く音)

母 文子なの？

文子 ...(無言)

母 文子、今日は遅かったじゃない。どうしたの、こんな時間まで？

文子 典ちゃんちで勉強してたから。

母 こんな時間までご迷惑じゃないの。それに今日は、正也が帰ってくる日だって分かってるのに。

文子 まー君は？

母 もう寝ちゃったわ。明日は手伝いなさいよ。それから、夜中に正也をトイレに連れてってね。それと、日曜日、学園に帰る時、あんたが送ってやってくれないかしら。

文子 あたしが？ 何であたしがそんなことしなくちゃいけないのよ。

母 何でって、だって、あんたの弟でしょう、正也は？

文子 弟だって何だって、イヤなものはイヤ。あたし、絶対に連れてなんかいかないからね。そんな施設なんて暗いところ、冗談じゃないわよ。

母 何言ってるんですか。「わかば学園」はいい学校ですよ。園長先生はクリスチャンで、立派な方だし。文子も、一度お話でも聞いてきたら？ 最近、随分イライラしてるみたいじゃないの。

文子 うるさいなあもう。とにかく正也送っていくのはやだからね。絶対やだからね。
(バタバタと2階に駆け上がる)

母 あ、文子、文子! (ため息)

文子(モノローグ) 何よ、お母さんのほうこそ、正也正也って。あたしのことなんかほったらかしにして。あの子のお陰で、あたしがどんな気持ちを味わってるかなんて、ちっとも分かってないんだ。障害者の弟がいるなんて、だれにも知られないように、必死で隠してんだから。あたしのほうが病気になりそうだよ。今年は3年で受験だってあるのに。こんなじゃ勉強に身が入るわけないよ。...あー、もうどうして、あたしばっかりこんな目に遭わなきゃいけないの？ どうして?(どうして?...とエコー効果)

ナレーション これが、文子が弟正也の障害を知ってから、ずっと心に抱いてきた問いかけでした。どうしてうちの正也だけが、こんな体に生まれたの？ 満足に言葉も話せず、ただ手足をやたらとパタパタ動かす正也。自分一人では、ご飯を口にちゃんと運ぶことも、トイレに行くこともできない弟の姿。そして、そんな弟にかかりきりの両親を見ているうちに、文子はいつしか、なぜ、自分だけがこんな目に遭うのか、という思いを募らせていくのでした。そんなある日のこと。
(授業中)

先生 では、教科書の14ページから。この前の時間の復習だから、みんな覚えているだろうな。宿題にしてあったはずだぞ。それじゃ答えてもらおうか。えーと、塚田。

文子(モノローグ) えー、ウソ。覚えてないよ。

先生 塚田文子、どうだ？

文子 分かりません。
先生 分かりませんじゃないだろう。宿題だったはずだぞ。
文子 忘れました。
先生 忘れたって、塚田、お前、確かこの前も宿題忘れだったな。
典子 (小声で)文ちゃん、これ。
先生 こら! 隣、藤沢典子、教えるんじゃない。
典子 すみません。
先生 塚田、どういうことだ。お前、少したるんでるぞ。今年は受験生なんだからな。どんな小さなことでも、いいかげんにしないで、きちっと身に付けていかんと、高校入試はそんなに甘くはないぞ。
文子 でも先生、あたし、どうせ頭悪いですから。
先生 何だ、その言い草は。そんな態度でどうするんだ。お前たちは、みんな、丈夫な体と、ちゃんといい頭があるじゃないか。世の中には、身体的ハンディキャップを負っている人だっているんだぞ。目が見えなかったり、車いすに乗ったり、知恵遅れの子だっているんだぞ。そういう子たちだって、一生懸命に生きてるんだ。それに比べたら、お前たちはまだまだ恵まれてるぞ...(F0)
文子(モノローグ) それがどうしたって言うのよ。内の弟だって障害児よ。自分では何もできないような子よ。だから、家族がみんなその犠牲になってんのよ。先生なんて、何も分かってないくせに、知ったかぶりして勝手なこと言わないでよ。
先生 おい塚田、聞いてんのか?
典子 (突然)先生、やめてください!
文子 いいよ、典ちゃん。
先生 何だ、藤沢。言いたいことがあるんなら、はっきり言ってみろ。
典子 文ちゃん、言ったほうがいいよ。こんな風に言われたらかわいそうだよ。
文子 典ちゃん、いいってば。
典子 (きっぱりと)先生、先生は今、障害児だって一生懸命生きてるって言いましたけど、障害児の家族だって、大変なんです。塚田さんには、重度障害の弟がいるんです。
クラス (口々に)えー/ 本当? ...
典子 重い知恵遅れで、今、施設に入っているんですよ。それで塚田さんは...。
文子 やめて! 典ちゃん、やめてよ!
(音楽) (ショッキングな感じ)
ナレーション 今まで必死で隠してきた知恵遅れの弟のことが、クラスメートに知られてしまった。文子はどうしようもない気持ちで、家に帰りました。
文子(モノローグ) ひどい。典ちゃんたらひどい。あんなに秘密だって言ったのに。みんなの前で言っちゃうなんて!

(効果音) (以下*印、エコー音)
*クラスメート (男子)塚田さんの弟、知恵遅れなんだってよ。(女子)かわいそう。(女子)大変ねえ。
*文子 やめて、やめてよ!
(効果音) (母親、文子の部屋をノックする)
母 文子、どうしたの? ご飯も食べないで。具合でも悪いの?
文子 ほっといてよ。ご飯なんか要らない。
母 要らないって、学校で何かあったのかい?
文子 お母さんのせいよ! 正也みたいな弟、産んだから。だからみんなに変な目で見られたりしちゃうんじゃない。
母 正也? 正也のことで何かあったのかい?
文子 そうよ。あったわよ。みんなに「かわいそう、かわいそう」って同情されたわよ! あたしはいいさらし者よ。お母さん、どうしてあんな子産んだのよ! 正也なんて、正也なんて、生まれてこなければよかったんだ!
(効果音) (母が「バシッ」と文子を平手で打つ音)

<後編>

ナレーション 新学期が始まって、まだ間もないというのに、塚田文子は何となく気持ちが沈みがちでした。中学3年生になり、いよいよ受験に取り組む姿勢となってきたクラスメートたち。けれども今、文子の心を占めているのは、受験ではなく、弟の正也のことでした。重い知恵遅れのため、施設に入っている弟のことを、だれにも秘密にしてきた文子でしたが、ある日、ふとしたことから、親友の藤沢典子が皆の前で話してしまったのです。

クラスメート (口々に)塚田さんの弟、知恵遅れなんだって! え、ほんとかよ。/ かわいそう。
文子 お母さんがいけないのよ。正也みたいな弟産んだから。だから、あたしまで、みんなに変な目で見られちゃうんじゃない。正也なんて、正也なんて、生まれてこなければよかったんだ!

(効果音) (母が「バシッ」と文子を平手で打つ音)
文子 何よ。
母 文子、あんたは自分の弟のこと、そんな風に思ってたのかい? そんなに正也が憎いのかい?
文子 ……。(モノローグ) そうじゃない、そうじゃないのよ。憎んでいるわけではないじゃない。自分の弟なんだもん。ただ、ただみんなから好奇心で見られるのがたまんないんだよ。それに、何であの子だけが苦しまなきゃいけないの? 弟だと思うから、余計につらいんだよ。時々、かわいそうで見えていられない。正也だって、あんな

ふうな体で一生苦労していくよりは、生まれてこないほうがよっぽど幸せだったんだ。それなのに…。どうして？

(効果音)

(休み時間の教室のガヤ)

典子

文ちゃん、こないだはごめんね。

文子

え、いいよ、別に。典ちゃんのせいってわけじゃないよ。

典子

でも、あたしがかかってにまー君のこと、しゃべっちゃったから、文ちゃん怒ってるんじゃないかと思って。

文子

もういいって、そのことは。

典子

でも…。

文子

もう、いいかげんにしてよ。そのことはもう話したくないんだから。

典子

文ちゃん…。

文子(モノローグ)

あーあ、またやっちゃった。典ちゃんに八つ当たりしてもしようがないのに。このごろあたし、なんかいらいらしてばっかりいるなあ。あーあ、みんな、休み時間だっているのに、単語カードなんか見ちゃって、よくやるよ。あたしは受験勉強なんて、ちっともやる気分じゃないっていうのに。

(効果音)

(校内放送のチャイム。)

お呼び出しいたします。3年B組の塚田さん、電話が入っていますので、至急職員室に来てください。3年B組の塚田さん、至急職員室に来てください。

(効果音)

(放送終了のチャイム音。)

女子 1

文子、あんたじゃない？

文子

うん、何だろう。イヤだなあ。

(効果音)

(職員室の戸をガラガラ開ける音。)

文子

失礼します。

先生

ああ、塚田、お宅からお電話だぞ。お母さんからだ。

文子

はい、すみません。…もしもし、お母さん？

*母(効果音)

(*フィルター音)あ、文子。あのね、大変なんだよ。さっき、わかば学園から連絡があつてね。正也が…。

文子

何？ 正也に何かあったの？

*母

それがね、お母さんにも詳しいことは分からないんだけど、2階の教室も窓から落ちたらしいんだよ。とにかく、お母さんこれから病院に行くから。文子も学校から帰ったら、わかば学園のほうに寄ってみてちょうだい。じゃ、頼んだわよ。

ナレーション

思いがけない母からの知らせに驚いた文子でした。その日の学校の帰り道、文子は、電車で1時間ほどのところにある、わかば学園を初めて訪れました。

文子(モノローグ)

えーと、この道でいいのかなあ。さっき交番で聞いた時は、駅から5、6分って言われたけど、もう10分ぐらい歩いてんじゃないかな。あ、薬やさんあった。その角を、

左...と。

(効果音)

(遠くから子供たちの声、次第に大きくなる。)

文子

それにしても、正也ったらどうして教室の窓なんかから落っこちたんだろ。あーあ、もう。だからああいう子たちは危ないんだよ。全く、何するか分かりやしないんだから。.....あ、あった。ここかぁ。「重い知恵遅れの子供たちの施設 社会福祉法人わかば学園」か。へえ、十字架がある。なんか教会みたい。そう言えば、キリスト教の施設だって言ってたっけ。

(効果音)

(子供たちの遊んでいる声。)

文子

こんにちは。

保母

はい。

文子

あの、塚田ですけど。あの、弟が...

保母

あ、正也君のお姉さんですね？こちらへどうぞ。正也君、少し前に病院から帰ってきたところなんです。

文子

あの、どんな具合なんですか？

保母

ええ、幸い、落ちたのが花壇の上だったもので、軽い打ち身と、左足をねんざしただけで済んだんですけど。もう一時はみんな慌てちゃって。...あ、ここです。

(効果音)

(ドアをノックする音。)

保母

園長先生。正也君のお姉さんがいらっしゃいました。

大沼園長

やあ、こんにちは。よく来てくれましたね。園長の大沼です。

文子

こんにちは。塚田....

大沼

塚田文さん？

文子

文子です。あの、どうしてあたしの名前....

大沼

ああ、いつも正也君から聞いてましたよ。文姉ちゃん、文姉ちゃんって。

文子

正也が？

大沼

そうですよ。今日は心配されたでしょう？早速顔を見せてあげてください。

(効果音)

(ドアを開ける音。)

大沼

正也、お姉さんだよ。...どうだ、痛いかな？

正也

あ、文姉ちゃん....

文子

まー君、痛い？大丈夫？

正也

ちょっと...痛い。

大沼

正也、よかったな、お姉さん来てくれて。...文子さん、この子は、あなたに見せたくて、今までに作った工作や絵を大切に取ってあるんですよ。

正也

僕の、絵、文姉ちゃん、見たい？

文子

うん、まー君、見せてね。

大沼あ

じゃ、ついでに、せっかくいらしたんだから、学園の中もご案内しましょう。

文子

先生、正也は絵なんか描けるんですか？

大沼 見たことないんですか？ すばらしいやつを描きますよ。正也君だけじゃない。この子供たちは、算数とか、難しい漢字とか、そういうことはできないけど、代わりにみんなそれぞれ、心にすばらしい宝物を持っているんですよ。

文子 宝物？

大沼 そう。あの子たちのことを今、一般的には精神薄弱児と言いますよね？

文子 はい、あたしも言われました。「お前の弟、精薄だ」って。あたし、すごくイヤだった。

大沼 確かに、あの子たちはほかの大多数の子供たちより、知恵というか、知能は遅れてるかもしれない。でも精神は、心は薄弱なんかじゃないんです。いや、むしろ、ほかのだれよりも美しい心、強い精神を持っていると、わたしは思います。しかもそれは、今の正常な知能を持った子供たちの中にはだんだん失われている、実に貴重なものだ。文子さん、今日正也君が、誤って2階の窓から落ちたと聞いた時、わたしは不思議に思ったんです。彼は、普段は慎重で、自分から危ない所に行ったりすることは、まずないからね。

文子 あ、あたしも、何で正也がそんなとこに思ってたんです。

大沼 そしたら、こういうことだったんですよ。同じクラスに孝夫という体の弱い子がいるんです。で、その孝夫は鉄道が好きで、いろんな珍しいSLの写真を集めてるんですが、特に大切な写真を友達に見せてたら、それが風に飛ばされちゃった。

(音楽)(効果音) (*エコー)

* 正也 あ、孝夫君、泣くなよ。泣かないでよ。僕が取ってくる。大丈夫、僕が取ってくる。...よしよ。孝夫君の絵、待って。孝夫君の大事な絵、待って。よしよ。...あっ!

大沼 風があったんで、彼も慌てたんでしょう。つい足が滑っちゃったんですね。こちらでも、監督が甘かったこともあって、申し訳ないんですが。

文子 正也がそんなことを...

大沼 それでね、事故のあと、本人にどうしてあんな危ないマネをしたのか問いただしたんですが、言わないんですよ。孝夫をかばってたんでしょうね。我々もあとで周りにいた子たちに聞いて、やっと事情がのみ込めたってわけです。彼は本当に心の優しい、いい子ですよ。

文子 園長先生、あたし、正也のこと、ずっとかわいそうな子だと思ってました。あんなふう生まれついて、一生、人の世話になって生きていかなくちゃならないなんて。本人もかわいそうだし、その家族にとってもお荷物だって思ってた。お友達にも恥ずかしかった。あの子は、生まれないほうが幸せだったんじゃないかって。

大沼 今もそう思ってますか？

文子 ...いいえ。今は、何て言うか、園長先生のお話聞いて、あたし、自分の弟なのに、あのこのこと何にも分かってなかった。ううん、分かつてもしなかったんじゃない

いかって気がしてきました。でも...やっぱり、ちょっと不公平じゃないかなとも思うんです。

大沼 どうして正也だけが、と言うんでしょう？ しかし文子さん、ほかの健康な子たちだけじゃなく、あの子たちの命も、同じように神様から与えられた、尊いものですよ。いやむしろ...わたしはいつもあの子たちに言ってるんですよ。「君たちは、神様に特別にえこひいきされて、かわいがられている子供なんだよ」ってね。

文子 神様に、えこひいき？

大沼 ははは。ま、それは極端な言い方だけどね。

文子 でも、それは逆じゃないですか？ なんか、神様に見放されてるって感じがしますけど。

大沼 うーん。普通はそう考えるだろうね。でもね、神様は、愛してる者には、時にすごく厳しい状況に置かれることがあるんです。聖書の中にね、「わたし(神様)の恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。」(コリント12:9)という言葉がある。わたしたち人間の目から見ると、弱くてどうしようもないという状態の中に、神様の恵みが実はいっぱい隠されているということがあるんです。あの子たちは、口に出して言葉でしゃべるのは下手だが、その小さな魂は、いつも叫んでいる。わたしはあの子たちによく言うんですよ。「神様は、君たちの、どんな小さな声でも、心の中の叫びでさえ、聞き漏らすことはないんだ」ってね。文子さん、あの子たちの顔を見て、どう思いました？

文子 あ、頭ん中で考えたイメージとあんまり違うんで、驚いてるんです。明るくて、特に目が、あの目がなんかとっても澄んでて...

大沼 でしょう？ 自分たちが神様に愛されてるってことを、実感してるんですよ、あの子たちは。

ナレーション 園長先生の言葉を聞きながら、文子は、目の前の子供たち一人一人を、力いっぱい抱き締めてあげたい衝動に駆られていまして。そして、神様が正也の心の叫びを聞いてくださるなら、その声が周りの人にも聞こえるように、自分自身がまず「耳」になろう、そして正也の「口」に、「手足」になってあげようと、その時心に誓ったのでした。

(完)